様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：３２６２１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２１３５

研究課題名（和文）西洋古典古代における「幸福」論の系譜

研究課題名（英文）A Genealogical Study of the Eudemonism in the Classical Antiquity

研究代表者
荻野　弘之（Ogino, Hiroyuki）

上智大学・文学部・教授

研究者番号：２０１７７１５８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：（１）幸福主義の源泉であるアリストテレス倫理学研究の進展。複数の倫理学書を総攬することで「包括主義」対「卓越主義」の論争に対して調停的な読解の可能性を探った。（２）ヘレニズム時代とローマ期ストア哲学の幸福論の読み直し、特にエピクテトスの現代的読解の可能性を開拓した。（３）1980年代以降の徳倫理学の隆盛は哲学史的研究の深化と連動しているが、コーチングを哲学的に基礎づける新しい試みを開拓しつつある。（４）「人生の意味」を問題とする倫理学の傾向に対して、幸福の概念を幸福感という主観的要素に還元しようとする前提の妥当性を検証した。（５）これは昨今経済学で言及される「幸福度」の指標の批判に通じる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は「幸福とは何か」という倫理学発生以来の問いに対して、最終的な解決を齎す一義的な回答を与えることが目標ではない。むしろ「幸福とは何か？」という問いがいかなる背景や前提をもってなされているのか、という、いわば「問いの意味」を分析する、メタ倫理的な考察こそが重要であり、そのために、歴史的・思想史的なサーヴェイと、より原理的な日常言語と、モラル・サイコロジーの分析手法が必要とされるのである。この作業を通じて、昨今の安易な幸福論の独断的な主張を批判するいくつかの視点を確保することができたのであり、それは狭く学会や講壇哲学ではなく、より広く市民的な哲学活動にも役立つと考えられる。。

研究成果の概要（英文）：(1) A review of the Aristotelian ethics as a major source of the classical Eudemonism based on the exact philological comparison of his treatises: EN, MM, and especially EE., so as to reconcile the inclusivist and the dominant interpretations. (2) A historical survey of the Roman Stoicism, especially the new reading of the Enchiridion of Epictetus the civil ex-slave philosopher, referring to the contemporary studies of Hellenistic Ethics. (3) Developement of the philosophy of Coaching techniques from the view point of the Virtue Ethics developed since 1980s. (4) A criticism of the new trend of "the meaning of life" instead of the traditional value concept of "well being"in the moral philosophy. (5) A critical analysis of the measurement of Happiness, recently often mentioned in the economics.

研究分野：哲学

キーワード：幸福論　よく生きる　人生の意味　アリストテレス　ヘレニズム哲学　カント　功利主義

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

（１）「幸福」（eudaimonia, beata vita）は、古代・中世における倫理学の成立当初から、その中心課題であったにもかかわらず、今日では、個別の思想史的研究は別として、正面から課題として取り上げられることは少ない。事実、日本倫理学会、日本哲学会などの全国学会や西洋古典学会や中世哲学会など時代ごとの専門学会でも、発表や論文投稿を見る機会は稀である。これに対して一般読者を対象とする入門的哲学書や自己啓発本などでは、通俗的内容ながら幸福論への需要は高い。学会と一般読書界との間での著しい関心の乖離――これこそが幸福論をめぐる言論のあり方の特徴であろう。文学者や宗教家、成功した事業家などのアマチュアが自分の経験や人生訓を並べるが、他方で思想研究のプロは手を出さずに傍観・冷笑する、というのが今日の不幸な知的状況である。

講壇哲学が幸福を扱わない理由は二つある。(i) 主題の性格上、厳密な論証ができない。人々の一般通念は様々で、「ああも言える、こうも言える」というだけの蓋然的な記述しか期待できず、学問的性格になじまない。(ii) 明治期以来、日本の哲学研究に強い影響を与えたカントが、幸福（Glücklichkeit）を低く評価し、道徳哲学の原理から排除した。幸福は単なる自然的傾向性の延長にある、利己的な動機に支配される概念だとしたこと、の二点である。(iii) これに対して 19 世紀の功利主義は、幸福主義を一方の原理とするが、同時に快楽主義をも原理として取り入れることによって、ミルの意図にもかかわらず、幸福の内実は著しく主観的性格を帯びることになった。今日でも幸福とは「幸福感」の問題だと無意識に前提している人は多い。

（２）近年では、テリー・イーグルトン、ロバート・ノージックなどによって、在来の「幸福」に代えて「人生の意味」を問題にする新しい傾向も芽生えており、日本でもこれらの動向が徐々に知られ、紹介や翻訳が進みつつある状況である。これは「働き方改革」に見られるように、仕事と余暇の関係、生き甲斐といった問題に通底する。

（３）21 世紀にはいって経済学が幸福を積極的に論じるようになりつつある。これは所得の倍増や経済成長によってだけでは、成熟した社会において幸福が実現できないということの反省にたって、経済学が学問として道徳哲学や政治学から自立し始めた 18 世紀の問題意識に立ち戻ることをも意味している。その際、幸福を経済学・政治学・心理学が扱うためには「幸福概念の科学化」必要であり、その中軸となるのが「幸福度」という尺度である。幸福は、単に哲学や文学・宗教の問題だけではなく、より一層科学化されて、社会政策として組み入れられるようになりつつある、というのが昨今の情勢である。

２．研究の目的

以上に述べたような出発点の問題意識をふまえて、本研究は以下のような複数の研究目標を立てた。

（１）アリストテレス倫理学の文献学的研究。幸福主義倫理学の最大の源泉であるアリストテレスを、従来のように主著『ニコマコス倫理学』第 1,10 巻だけに依拠して論じるのではなく、『エウデモス倫理学』『大道徳学』という他の著作を並行させることによって、複眼的視点から検討し直す。

（２）ヘレニズム時代、特にローマ期ストア派の幸福論の読み直し。以上の二つはオーソドックスな思想史的研究による新たな知見を得ることを目指している。

（３）コーチングの理論の深化。徳倫理学は比較的同質的な価値観を共有する小規模な社会では効果的に機能するが、チーム・スポーツに見られる役割の意識はその最も分かりやすいモデルである。このことから逆に、メンバーの徳性を涵養することが全体を裨益する、個人の幸福の次元ではなく、社会共同体の幸福につながる視点を取り出そうとする試みが生まれてくる。

（４）カントの義務論的倫理学の再検討。及び古典的から現代にいたる功利主義における幸福と快楽の概念的つながりの解明。

３．研究の方法

（１）第一は、思想史研究の定石に従って、古典的なテキストの読み直しの作業が中心となる。アリストテレス（荻野・佐良土）、カント（辻・中村）、コーチング理論（佐良土・中村）、「人生の意味」の概念の検討（荻野・辻）など、代表者と分担者 3 名が、個人で、また相互に討議を踏まえて、鍵となるテキストを精査することで、これまで常識とされてきた読み方や解釈の修正・変更の余地を探る。

（２）以上の課題達成のためには、必要な文献の組織的収集が組織的になされる。このために、

代表者と分担者が所属する上智大学の図書館、研究所の所蔵にかかる研究資料を大いに活用することを念頭に置いた。
（３）これらの個人研究の蓄積をふまえて、年に数回、研究会合、打ち合わせを上智大学哲学研究室で行なう。必要に応じて、国内外の関連分野の研究者との交流も行なう。

４．研究成果

言うまでもなく本研究は「幸福（よく生きる）とは何か」という古代ギリシアにおける倫理学発生以来の問いに対して、最終的な解決を齎す一義的な回答を与えることが目標ではない。むしろ「幸福とは何か？」という素朴な問いが、いかなる背景や前提をもってなされているのか、という、知的な後背地を考慮した、いわば「問いの意味」を分析する、メタ倫理的な考察こそが重要であると考えるものである。
そのためにも、歴史的・思想史的な精緻な跡づけを試みる一方で、より原理的な日常言語と、モラル・サイコロジーの分析手法が必要とされる。この作業を通じて、昨今の安易な幸福論や自己啓発本の独断的な主張を批判する、いくつかの視点を確保することができた。この点は本研究の成果の特徴でもあり、狭く学会や講壇哲学のうちばかりではなく、より広く市民的な哲学活動にも役立つと考えられる。

（１）幸福主義の源泉であるアリストテレス倫理学研究に大きな進展をみた。欧米の先行的研究を消化しつつ、先にも述べた複数の倫理学書を丁寧に総攬することで、Hardie 以来の「包括主義」対「卓越主義」の論争に対して調停的な読解の可能性を探った。これは哲学専門誌『理想』のアリストテレス特集（696 号）において、荻野による寄稿論文及び佐良土によるイェーガーの翻訳という形で結実した。同時に『アリストテレス全集 14』（岩波書店）の翻訳・解説においても潜在的に示されている成果である。
（２）ヘレニズム時代とローマ期ストア哲学の幸福論の読み直し、特にエピクテトスの現代的読解の可能性を開拓した。これは代表者・荻野の著書『奴隷の哲学者エピクテトス　人生の授業』（ダイヤモンド社）の刊行によって、新しい Boter 校訂本にもとづく『提要』の新訳が提供され、また一般読者向きの解説を通じて、ローマ・ストア主義の実践的性格を重要視して、狭い哲学史の枠組から解放する試みであり、刊行早々に一般紙の書評（毎日新聞、公明新聞）を通じても高評を博した。
（３）1980 年代以降の徳倫理学の隆盛は哲学史的研究の深化と連動しているが、コーチングを哲学的に基礎づける新しい試みを開拓しつつある。これは分担者の佐良土茂樹（日本体育大学）によって、教育実践を伴いながら、研究開拓中であり、今後の展開が期待される分野でもある。哲学をはじめ人文科学の研究が体育教育やスポーツ理論と有機的に結びつく可能性は、現在の大学教育の在り方にも一石を投じる可能性を秘めている。国内外の学会・研究会で複数にわたって発表された。なお継続中の研究である。
（４）ノージックによれば、20 世紀の哲学を特徴づけるのは「意味」への強い関心である。幸福という伝統的な価値概念に代えて、「人生の意味」を問題とする英米の倫理学の新傾向に対して、複数の立場から検討を加えた。この問題は、日本でも徐々に紹介が進みつつあるが、幸福の概念を「幸福感」という主観的要素に還元する 19 世紀以来の幸福論に対する反動として、生活の質（Quality of Life）の客観的基準を求めようとする志向と連動していると診断した。従来「生き甲斐」（神谷美恵子）あるいは最近では「ワーク・ライフ・バランス」など仕事の意味を問題にする動向と連動している。これに関してはリクルート・ワークス研究所からインタビューを受けたり、スルガ銀行のセミナーで講演したり、民間企業の研究機関とも連携を進めている。著作などのまとまった成果は、数年以内に刊行される見通しである。
（５）前項で言及した＜幸福の概念を「幸福感」という主観的要素に還元する＞暗黙の前提を検討することは、昨今経済学で言及される「幸福度」の指標の批判に通じる。幸福を、文学・哲学・宗教の領域ではなく、経済学や心理学の対象とする以上は、数値化できる客観的指標が求められ、それが「幸福度」という概念になる。しかしこれが当人の主観的な「満足度」に対して、いかなる差異を含むかは難しい。経済学が 18 世紀的な問題意識を再発見し、公共哲学との接点を持とうとする志向は歓迎すべきだが、この概念が政策目標として独り歩きする点に対しては、慎重であるべきだという見通しを得た。これについても、著作の形での総合的成果は、数年以内に刊行される見通しである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計17件（うち査読付論文　9件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 荻野弘之	４．巻 56
２．論文標題 古代哲学と倫理教育の課題	５．発行年 2018年
３．雑誌名 都倫研紀要	６．最初と最後の頁 74-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 辻麻衣子	４．巻 19
２．論文標題 テーテンス・ルネサンスとカント――「三重の総合」に見る経験心理学への態度	５．発行年 2018年
３．雑誌名 日本カント研究（知泉書館）	６．最初と最後の頁 73-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 U.ヴォルフラート　（辻麻衣子訳）	４．巻 1135
２．論文標題 新カント派と心理学――相互批判的関係とその結末	５．発行年 2018年
３．雑誌名 思想（号）岩波書店	６．最初と最後の頁 197-219
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 佐良土茂樹	４．巻 63-2
２．論文標題 コーチング哲学の基礎づけ	５．発行年 2018年
３．雑誌名 体育学研究（日本体育学会）	６．最初と最後の頁 547-562
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐良土茂樹	4．巻 40-2
2．論文標題 アリストテレス倫理学に依拠したコーチの「幸福」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 体育・スポーツ哲学研究（日本体育・スポーツ哲学会）	6．最初と最後の頁 131-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中村信隆	4．巻 69
2．論文標題 「恥を知れ」とはいかなる非難か	5．発行年 2018年
3．雑誌名 哲学（日本哲学会）	6．最初と最後の頁 215-229
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中村信隆	4．巻 19
2．論文標題 カント倫理学において尊厳の概念は重要な役割を担うのか――0・ゼンセンによるカント解釈の検討を通して	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本カント研究（知泉書館）	6．最初と最後の頁 138-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中村信隆	4．巻 10
2．論文標題 死刑は加害者の人間としての尊厳を否定するものか――表現的応報理論の立場から	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Contemporary and Applied Philosophy	6．最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 荻野弘之	４．巻 44
２．論文標題 「幸福とは何か？」という問いを考えるために	５．発行年 2018年
３．雑誌名 上智大学『哲学科紀要』	６．最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 荻野弘之	４．巻 46
２．論文標題 田中裕先生を送る	５．発行年 2017年
３．雑誌名 上智大学哲学会『哲学論集』	６．最初と最後の頁 25-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 荻野弘之	４．巻 504
２．論文標題 哲人・ソクラテスとその弟子たちに学ぶ	５．発行年 2017年
３．雑誌名 致知	６．最初と最後の頁 34-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 ポール・G・シェンプ著、佐良土茂樹訳・解題	４．巻 3
２．論文標題 バスケットボールコーチのメンタリングの分析	５．発行年 2017年
３．雑誌名 バスケットボール研究	６．最初と最後の頁 75-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 荻野弘之	4．巻 20
2．論文標題 岩下壮一師とアウグスティヌス	5．発行年 2017年
3．雑誌名 パトリスティカ――教父研究（発売・教友社）	6．最初と最後の頁 3-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 荻野弘之	4．巻 43
2．論文標題 レトリックについて――その歴史と構造	5．発行年 2017年
3．雑誌名 上智大学文学部　哲学科紀要	6．最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐良土茂樹	4．巻 2
2．論文標題 オリンピックにおけるM.シャシェフスキーのコーチング哲学について	5．発行年 2017年
3．雑誌名 オリンピックスポーツ文化研究	6．最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 辻麻衣子	4．巻 45
2．論文標題 心理主義から論理主義へ―ヘルムホルツ・ランゲ・コーヘン―	5．発行年 2016年
3．雑誌名 哲学論集（上智大学哲学会編）	6．最初と最後の頁 23-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 大橋容一郎監修・解説、庄子綾、辻麻衣子、渡辺和典、須賀佳苗（ラスク研究会）翻訳（共訳）	4．巻 43
2．論文標題 エミル・ラスク著『哲学の論理学とカテゴリー論―論理形式の支配領域に関する研究（1911年）』　翻訳と解説（4）（第2部第1章第1節）	5．発行年 2017年
3．雑誌名 上智大学文学部　哲学科紀要』	6．最初と最後の頁 65-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　5件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 佐良土茂樹
2．発表標題 善きコーチへの学びーー思慮と技術の観点から
3．学会等名 日本倫理学会 第70回大会
4．発表年 2019年

1．発表者名 佐良土茂樹
2．発表標題 コーチング哲学の育て方
3．学会等名 静岡県スポーツ指導者研修会
4．発表年 2019年

1．発表者名 Shigeki SARODO
2．発表標題 Phronesis as Practical Wisdom for Coaches
3．学会等名 International Council for Coaching　Conference（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 辻麻衣子
２．発表標題 良心は決して誤らない
３．学会等名 日本フィヒテ協会第34回大会（香川大学）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 佐良土茂樹
２．発表標題 アリストテレス倫理学に依拠したコーチの「幸福」
３．学会等名 日本体育・スポーツ哲学会　第39回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 佐良土茂樹
２．発表標題 コーチ哲学を作る
３．学会等名 茨城県バスケットボール協会第二回公認コーチリフレッシュ研修会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 辻麻衣子
２．発表標題 カントがテーテンスから受け取ったもの――「三重の総合」に見る経験心理学への態度
３．学会等名 日本カント協会第42回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 佐良土茂樹
２．発表標題 コーチング哲学をめぐる研究手法について
３．学会等名 日本バスケットボール学会第三回大会シンポジウム「バスケットボールを対象とした人文・社会・自然科学の研究方法（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 佐良土茂樹
２．発表標題 コーチング哲学をめぐる研究手法についての序説
３．学会等名 日本体育学会第67回大会ランチョンセミナー
４．発表年 2016年

１．発表者名 Shigeki Sarodo（佐良土茂樹）, Jun Sekiguchi, Osamu Morishima, and Masamitsu Ito
２．発表標題 Searching for a Better Community for Coach Developers to Learn
３．学会等名 The 2nd Asia-Pacific Conference on Coaching Science（Asia Association of Coaching Science）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2016年

〔図書〕　計8件

１．著者名 荻野弘之	４．発行年 2019年
２．出版社 ダイヤモンド社	５．総ページ数 246
３．書名 奴隷の哲学者エピクテトス　人生の授業	

１．著者名 ユルゲン・トラバント（辻麻衣子ほか訳）	４．発行年 2019年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 320
３．書名 人文主義の言語思想ーーフンボルトの伝統	

１．著者名 佐良土茂樹　（平野・土屋・荒井　共編）	４．発行年 2019年
２．出版社 培風館	５．総ページ数 223
３．書名 グッド・コーチになるための心得	

１．著者名 佐良土茂樹　（小谷究・小倉秀徳　監修）	４．発行年 2020年
２．出版社 日東書院	５．総ページ数 208
３．書名 バスケットボールが科学で強くなる	

１．著者名 荻野弘之（上智大学中世思想研究所編・訳）	４．発行年 2019年
２．出版社 平凡社	５．総ページ数 635
３．書名 中世思想原典集成　精選２　ラテン教父の系譜	

1．著者名 荻野弘之	4．発行年 2018年
2．出版社 東洋経済新報社	5．総ページ数 266
3．書名 ナレッジ・フォーラム講義録（野中郁次郎編）	

1．著者名 内山治樹・小谷究（編著）　佐良土茂樹（分担執筆）	4．発行年 2017年
2．出版社 流通経済大学出版会	5．総ページ数 239
3．書名 バスケットボール学入門	

1．著者名 フィヒテ　（鈴木伸国・辻麻衣子・共訳）	4．発行年 2016年
2．出版社 晢書房	5．総ページ数 570頁
3．書名 『フィヒテ全集第14巻　1805-1807年の知識学』所収　「知識学の概念とその運命」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	佐良土　茂樹 (Sarodo Shigeki) (40711586)	日本体育大学・総合スポーツ科学研究センター・研究員 (32672)	
研究分担者	辻　麻衣子 (Tsuji Maiko) (40780094)	上智大学・文学研究科・研究員 (32621)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	中村　信隆 (Nakamura Nobutaka) (60823367)	上智大学・文学研究科・研究員 (32621)	